

全国患者図書サービス連絡会会報

Vol.26 No. 2
(通巻 No.86)
December 2020

目 次

[報告とお知らせ]

連絡会の今後の姿—パネルから導かれた今後のあり方—
全国患者図書サービス連絡会会長 奈良岡 功…………… 1

患者図書サービスの現在と将来：諸団体の 20 年間の振り返りと展望
全国患者図書サービス連絡会役員 石井 保志…………… 3

今後の活動に関するお知らせ
全国患者図書サービス連絡会役員 磯野 威…………… 7

会計報告 …………… 8

新型コロナ下の患者図書室の対策に関する小報告
第二川崎幸クリニック図書ボランティア 成田 俊行…………… 9

コロナが変えていく情報の流れ
神奈川県立こども医療センター 高増 哲也……………11

[投稿規定] ……………14

[編集後記] ……………16

<報告とお知らせ>

連絡会の今後の姿 — パネルから導かれた今後のあり方 —

全国患者図書サービス連絡会会長

奈良岡 功

I. 患者図書サービス連絡会を取り巻く過去と現在：環境の変化

当連絡会の会報（25巻1号2019年）にパネル講演会開催のお知らせを磯野・山口の両役員が予告した。同号に「患者図書サービスと私」と題する拙文を会長としてではなく、当連絡会の設立にかかわった役員の一員として、活動を振り返った。直後に開催を予定していたパネル講演会とは別に、私の私見を述べておきたかった。

2019年12月15日に当連絡会主催のパネル講演会「患者図書サービスの現在と将来：20年間の振り返りと展望」を関連団体（日本図書館協会、日本医学図書館協会、日本病院ライブラリー協会、健康情報棚プロジェクト、それと当連絡会）に参加をお願いして開催した。パネル講演会の参加団体からは、それぞれの忌憚のない“活動報告と将来展望”を伺うことができた。パネル講演会の内容は会報25巻2号（2019）を参照されたい。今回のパネルでの各団体の発足から現在に至る発表から受けた印象は、当連絡会の設立当初に掲げた目標は既に終わっていることが確認できたことである。すなわち、私の患者図書サービスに関する現状認識（終息または収束）を再確認するためのパネル講演会となった。

全国患者図書サービス連絡会が創設された1994年（平成6年）1月30日から26年が経過した。創設時には、この種の団体がなかった為に活動の対象を“総花的”に広げる必要があった。患者図書サービス（当時は一般書籍サービスがほぼ全て）を行っている病院は全国に「点」として孤立した存在であった。この「点」を「線」で結び「面」として活動を支援していくことが当連絡会の設立目的の一つであった。

この26年間に患者図書サービスを取り巻く環境は大きく変化した。闘病記の著者は作家（文筆業）から一般市民（患者や家族）に移行したが、価値が見直されて患者図書サービスの提供資料として一部の方々から評価された。この他にも、医療を提供する病院には「患者さんへの説明義務」（インフォーム・ドコンセント）と「患者さんの知る権利」（病名告知・カルテ開示・セカンド・オピニオン）が叫ばれた。最初は病院スタッフ（主に医師）のために医局内に設けられた小規模の図書室を担当していた医局秘書が、片手間に入院患者さんにもサービスしていた。その後、患者や家族が病気の診断・治療に関する医学情報を得るための機能を整備することが病院評価項目に盛り込まれた。これらの動きは、十分な社会的ニーズの熟成が出来ていないまま、即ち、現状認識や分析に基づいた基準もないまま、一気に患者図書室の設置が進められた。この動きとは別に、ボランティア活動としての患者図書室（医学関連書のほかに一般書もサービス対象）活動が地道に続けられていた。

近年、上述の活動も一時活発な時期もあったが、病院の経営状態が厳しい時代になると、経営者は人件費と予算削減の矛先を患者図書室に向けて、一部を除いて衰退していくことになった。

今回のパネル講演会で発表してくれた各団体は、長い期間それらの推移を見て現在に至っている。このように一見フェードアウトへ加速したかに見えた現象の背後には、もう一つの新たな側面が存在し、作用していた。それはインターネットの検索ツールの進歩・普及であった。当初、検索するには特殊な知識（検索技術）と環境（インターネット接続）が必要であった。しかも有料であった医学データベースが無料開放され、検索の知識や技術に精通していなくても、検索してある程度の情報を得ることができる環境に変化しつつあった。専用の医学データベース以外にも、一般に普及している検索エンジン（yahoo、Google など）を利用しても、ある程度のヒット件数を得ることが可能になってきた。その結果、ヒット件数の確保と検索の精度（適合率）を上げることと、利用者が検索結果の評価能力を高めることが必要になってきた。

現在、必要なのはインターネット上で検索の質を上げることである。従って、今、必要なのは、検索リテラシーの教育と検索結果の評価法の指導マニュアルを作成することである。これらの作業を完遂するには、人的・財政的・組織的に盤石な団体に取り組むか、複数の団体が参加する作業委員会が必要になる。

II. 今後を描くための現状の確認

今回のパネル講演会の発表内容は、当連絡会が現状確認と今後のあり方を検討する時期にあることを示唆していると考えられる。

当連絡会の設立から四半世紀を経て、当初設定した目的の守備範囲内にあると考えてきたものが、発表内容からも分かるように他の団体内に設置された目的ごとの委員会などが活動してきた。しかも、当会よりも団体としての設立基盤が盤石な組織もあることから、協力することで我々の現在と将来における果たすべき役割はあるのか、他と競合してまで存在する意義はあるのかを真剣に考えて決断する時期に来ていると思われる。

III. 終わりに：今後の姿の模索

当連絡会の役員会は、コロナ禍の収束（または終息）の目途が立って活動が再開できるまでの間、連絡会活動を「休会」として役員会機能を除く「会費の徴収」「会報の発行」を含む「連絡会としての活動」を停止することを決定した。ただし、前述の環境の変化を見据えて、“今後の連絡会のあり方”を役員会はWeb会議等による検討を行い、内容は随時ホームページに掲載していくことになる。

コロナ禍の収束後には、連絡会の活動に大きな変化が待っていることも予想される。

会員の皆様には、現状での役員会の「休会」の決定をご承認の上、しばらく役員会からの検討報告をホームページで確認してご意見を頂ければ幸いです。

<報告とお知らせ>

患者図書サービスの現在と将来：諸団体の20年間の振り返りと展望

全国患者図書サービス連絡会役員

石井保志

I. はじめに

全国患者図書サービス連絡会（以下、連絡会）は、設立から25年間余り活動を続けてきた任意団体です。しかし、ここ数年は会報発行など次第にルーチン的な活動が主となってきました。そのような中、日本の患者図書室関連の諸団体の多くが20周年を迎える時期がやってきたこともあり、この機にシンポジウム開催の企画が持ち上がりました。他団体も歴史を重ねる中、設立当初の目的を概ね達成し、次のターゲット設定や活動活性化へ苦慮しているのではと思ったからです。

そこで諸団体が一同に会し、今までの活動の総括と患者図書室の将来像について大いに意見を交換する試みを行いました。2019年12月15日（日）、東邦大学大森キャンパスを会場に、5団体のパネルディスカッションが実現しました。

本稿では、このシンポジウムから得た知見をもとに、筆者の考える20年間の振り返りと今後の患者図書室の展望をまとめてみたいと思います。

II. 患者図書室5団体によるパネルディスカッション

パネルディスカッションの企画化趣旨にご賛同いただいた団体は、日本図書館協会、日本医学図書館協会、日本病院ライブラリー協会、全国患者図書サービス連絡会、健康情報棚プロジェクト（以上、設立順）。この5団体が揃うのは、初めてのことです。

本シンポジウムには、他の主要2団体へも招聘を検討していたものの、活動休止あるいは休止検討中で、もう1年早く開催できていればと残念に思ったことを申し添えさせていただきます。

では、まずはシンポジウムの要点をまとめてみます。

1. 各団体の活動歴と事業

最初のセッションは、各団体の発足経緯、活動歴の報告が行われ、基本的な組織の紹介がされました。いずれも長期に渡る活動について個別・具体的な説明がなされました。活動歴をまとめるとどの団体も、①患者図書室のためのマニュアル発行、②研修会開催、③他団体との連携の3点に集約された印象を受けました。登壇者の皆さんの丁寧な説明のお陰もあり、各団体の背景や活動目標の差異も併せて認識することができました（表1参照）。

感想としては、組織としての継続性や今後の活動等に関しては、窮状が吐露されることはないものの、各団体とも共通して、①構成員の流動性確保や高齢化が問題となっ

ている。②新規事業の立ち上げや、積極的な事業拡張をはかるのではなく、現状維持または活動縮小の方向性が見られた。③外部団体との連携は、積極的に連携を求めるといふより、他機関からのお声がけを機会に連携する、というような傾向が見られました。

このような諸団体の抱える問題点を3点に集約してみました。5団体とも発足当時のモチベーションを長く持続することは難しい課題であると認識されているように思いました。また各団体が他機関を含めた社会との結びつきも、「言うは易く行うは難し」で情報発信や連携が充分と言えるまでではなかった模様です。そのような状況で、組織上惰性的に活動が継続されている印象を受けたのはやむなしと感じました。設立5年経過後くらいから活動は全体的に低調となる傾向が見受けられました。

2. パネルディスカッション

時間的な制約もある中、司会の山口直比古氏のすばらしい進行は、各団体の登壇者から様々な意見を引き出してくださいました。良くまとまったシンポジウムとなり、成功だったと思います。この時間では、4つの課題に対して登壇者にコメントが求められました。ここでの内容は連絡会会報 25(2)に磯野威氏がまとめてくださった別稿に譲りますが、この時間のキーワードは、各団体の持続可能性（役員体制や患者図書サービス事業）や、患者図書室の将来性の2つに集約されていたように思います。この問いかけに明確な答えを出すことは難しいものです。それ故に中には抽象的な意見交換になった一面もあったものの、有意義な時間となりました。

III. 患者図書サービスの社会的ニーズ

今回のシンポジウムの個人的な感想として、患者図書室の必要性に関して、各団体の考え方の背景や方向性の特徴を感じられました。かつて第三者からは、「やりたいことは一緒なんだろう。諸団体が乱立してないで、大きな組織にして活動した方が社会への発信力も増すのでは」という声も聞こえました。この指摘も、「言うは易く行うは難し」であり、そのとおりの部分もありますが、乱暴に一元化し、各団体の細やかな利用者サービスや担当者の志などを画一化するものでもないでしょう。しかし、筆者自身、患者図書室を作りたい、役立てたいという思いが社会全体のニーズから出発していないのが、今後の発展性に陰りを生んでいるのではという印象を受けたのも正直な感想です。

もちろん病院当局に患者図書室を認めてもらえれば、と言う他力本願な立場の発言はなかったものの、病院や医療界への働きかけのうねりがあまりみられなかったことが20年間の活動において大きな弱点のように思えました。

しかし、各団体の役員・ご担当者は真摯に地道に活動されていることから、そのことを批判しているわけではありません。今回の5団体が集うことにより見えてきた部分が確実にあったことは確かであり、開催意義は大いにあったものと思います。

IV. 諸団体の設立当初と現在の比較

最後に個人的な感想の域をでませんが、前述の会報 25 (2) 掲載の各団体の報告から、患者図書室の活動は近年、全体的に低調であり、このままでは各団体との活動や委員会はフェードアウトする可能性があるように思いました。設立当初からの活動水準は努力により維持されていますが、新規のチャレンジは目立って行われていないことがその理由です。しかし、20年前には先進的な患者図書室の担当者は、各団体のリーダー格でもあったことから、時間経過とともに活動を高水準に維持できないことはやむをえないことです。むしろ個人活動を主にしてきた患者図書室への関心が、組織的活動に移行され、継続性を保ってきたのがこの20年間だったといえるのではないのでしょうか。インターネットが普及していなかった頃は、全国に点在した患者図書室のボランティアが試行錯誤しながら個々のやり方で立ち上げた時代でしたから、その時代と比べたらなんと進歩したのだらうと思います。

V. シンポジウムで見えてきたこと

今回のシンポジウムで見えてきたことを3つ挙げて稿を締めたいと思います。

1つ目は、今後の患者図書室活動の持続性・将来性については、従来の活動の延長線でやっていたのでは、大きな展望を持つことが難しいのではないかとということです。

2つ目は、患者図書室の諸団体はスクラップ&ビルドの時期を迎えており、設立当初の目標のみでは構成員のモチベーション維持や、連携を求められる魅力の欠如が映りました。

3つ目は、「なぜ患者図書室が必要なのか」を誰もが納得できる言葉が今だ「ないこと」です。この3点が筆者に強く印象付けられました。

そのため、団体の継続性を強く望む場合は、役員体制を多職種で構成し、単一のバックボーンを持つ役員のみで将来像を決めない方がよいように思います。またこれからの患者図書室を推進するリーダーは、先進的な患者図書室の責任者が候補者であり、そのリーダーの補佐に活動方針を強力に推進するスキルを持つ方をサポートにつけることだと考えます。

そして最も重要なことは、患者図書室の理念を明文化することではないのでしょうか。患者図書室の理念を明文化するプロセスを社会と何度も往復させ、共有しながら作り上げていくことが「遠くて近い道」ではないかと思えます。そうすればいつの間にか「なぜ患者図書室が必要なのか」を説明できる言葉が紡ぎだされてくるように思います。

VI. まとめ

2020年は新型コロナウイルス感染症で病院自体が、コロナ以前よりさらに特殊な環境になりました。しかし、アフターコロナは社会が大きく変化する境目となる可能性が高く、テレワークやオンライン授業などが既に社会に浸透し始めています。「通勤しない、通学しない」ことが、却って制約が強くなったことで突破しようという「うねり」が押し寄せ常識となっていくのではないのでしょうか。

患者図書室に対しても、「病院の理解が得られない」、「本からの感染が心配だ」というかつての杞憂だった案件を軽々と突破するイノベーションが起こる可能性をとらえることもできます。なんでもそのようなことで止まっていたのかと。今まで患者図書室の諸団体が少しずつ積み上げてきた実践とノウハウが、急に社会で必要とされる時期がやってくるかもしれません。

シンポジウムは2019年12月に開催されました。その2か月後の2020年2月に横浜港へダイヤモンド・プリンセス号が入港し、新型コロナウイルスが日本中に知られることになりました。まさにビフォーコロナの時期に、患者図書室を総括するイベントができたこととなります。この原稿を書いている時期は、2021年3月上旬。首都圏の緊急事態宣言がでている最中です。新型コロナウイルスで翻弄された1年でしたが、日本ではワクチンが医療従事者へ接種が開始され、アフターコロナへの社会変革の動きが見られています。様々な組織やボランティア団体の活動維持や後継者不足は、社会全体の課題でもあり、患者図書室の諸団体に限ったことではありません。

いま急いでこの20年間に記録し総括しておくことにより、今後の展望となり活発化の一助となることを願っています。

最後に、シンポジウムの開催にあたり、会場を提供くださった東邦大学の皆様、司会をお引き受けくださった山口直比古様、各団体登壇者の皆様、当日ご参加くださった皆様、そのほか関係下さった皆様に厚くお礼を申し上げます。

(表1)

5団体の活動方針および今後の活動

番号	団体名称	活動方針	活動歴	今後の活動	患者図書室全般への言及
1	日本図書館協会	調査研究、学習機会の提供、他機関との連携 (p.11)	<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアルの発行 (p.11) ・講演会開催 (p.11) ・研修会開催 (p.11) 	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症分野への対応 (p.13) ・障害者サービス委員会との連携 (p.13) 	
2	日本医学図書館協会	医療従事者のみならず、患者、その家族をも含めて情報提供する (p.14)	<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアルの発行 (p.15) ・公共図書館からの受託事業 (p.15) ・研究会開催 (p.15) 	<ul style="list-style-type: none"> ・公共図書館向けの活動を休止し、患者図書室支援へ活動焦点を絞る (p.16) ・患者図書室指針の策定 (p.17) 	
3	日本病院ライブラリー協会	患者図書サービス支援事業 (p.19)	<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアルの発行 (p.19) ・会員館への実態調査 (p.20) ・HP上での患者図書室紹介 (p.21) ・参考図書リスト作成 (p.22) 	<ul style="list-style-type: none"> ・患者図書室の現状調査 (p.25) ・患者図書室紹介HPの更新 (p.25) ・参考図書リスト作成の更新 (p.25) 	他団体との連携を取りながら、より多くの事例を紹介 (p.25)
4	健康情報期プロジェクト	患者・家族への情報提供方法の研究と実践 (石井記)	<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアルの発行 (石井記) ・モデル機の設置 (石井記) ・医療情報コーナー設置支援 (石井記) ・資料リスト作成 (石井記) 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報提供のパッケージ化 (石井記) ・LLブックの刊行 (石井記) ・当事者視点の資料研究と社会化 (石井記) 	患者図書室の残された課題 <ul style="list-style-type: none"> ・選書 (p.27) ・ニーズの把握 (p.27) ・情報提供方法 (p.27)
5	全国患者図書サービス連絡会	点在組織のネットワーク化、研修機能、コンサルテーション機能 (p.28)	<ul style="list-style-type: none"> ・マニュアルの発行 (p.29) ・講演会開催 (p.29) ・会報発行 (p.29) 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係諸団体との連携強化 (p.29) 	

※ (p.00) は、当日配布資料の該当頁。

<報告とお知らせ>

今後の活動に関するお知らせ

全国患者図書サービス連絡会役員

磯野 威

2020年度はコロナ禍により、会報は発行できましたが講演会の開催などの集会活動はできませんでした。

役員会では、2019年12月に企画開催された関係する5団体によります「患者図書サービスの現在と将来：20年間の振り返りと展望」（パネル後援会）をもとに、Web会議により今後の活動について検討を重ねてまいりました。その検討の結果、新型コロナの影響を考慮し、2021年度は休会とさせていただきます、今後は下記の通りの運営とさせていただきますことになりました。ご理解をいただければ幸いです。

1. 2021年度から当分の間、会費の徴収は行わない。
2. 「会報」の発行および「講演会」活動は休止とする。
3. ホームページについては継続する。
4. 今後の連絡方法として会員のメールアドレスを把握する。

本会の今後を図る上でも、会員の皆様からのご意見、ご提案をお待ちいたします。コロナ以後における生活はさまざまな課題を抱えたものとなりそうです。

皆様のご健康を心から祈念申し上げます。



令和2年度 決算報告

収入の部

費目	予算額	収入	備考
前年度繰越金	352,330	352,330	
2020年会費	200,000	144,000	36人分
2019年度会費	0	20,000	5人分
賛助会員費	60,000	60,000	
広告費	10,000	0	
雑収入	0	9	預金利息
講演会参加費	20,000	0	
合計	642,330	576,339	

支出の部

費目	予算額	支出	備考
会報発行費	110,000		
会報印刷費		41,140	26巻1号
		29,700	26巻2号
会報発送費		11,718	26巻1号
		8,260	26巻2号
講演会費	150,000	0	
講師謝礼		0	
講師懇親会費		0	
講師交通費		0	
役員会費	30,000		
会場費		0	
交通費		0	
事務局費	20,000	11,357	
合計	310,000	102,175	

次年度への繰越 474,164

 銀行預金（りそな銀行弘明寺支店） 442,248

 現金 31,916

<会計監査施行>

期 日 令和3年10月22日

場 所 磯野自宅（練馬区桜台1-37-18）

監査報告 令和2年度計理執行につきまして、金銭出納帳、各種領収書
および預金通帳との照合の結果、いずれも正確適正であり、
計画に沿って施行されていることを認めます。

監 事 磯 野 威



新型コロナ下の患者図書室の対策に関する小報告

第二川崎幸クリニック図書ボランティア

成 田 俊 行

I. はじめに

武漢発コロナ禍によって全国の患者図書室が苦況にあることは論を待たない。筆者の限界ある能力でのささやかな調査結果であるが、訪問1例と貴重なアンケート回答2例をもとに報告する。

唯一現場を訪問できた東邦大学医療センター大森病院「からだのとしよしつ」で実施されている対策は、考えられるかぎりの対策を徹底的に実施したら、こうなるだろうという対策のモデルと言えるレベルのものであった。訪問時にも利用者が一人居られた。

印象的であったのは紫外線除菌ボックスがあり、他部門からの貸し出し依頼が来るほど頼りにされているそうである。高価であるが、今なら購入できるかもしれない。低価格の製品も各社から出ている。今だからこそできる進歩、コロナをチャンスと捉える発想が必要とされているのではないか。



ビニール・カーテンによるゾーニング



キハラ製
紫外線除菌 Box
定価 ¥287,500

II. 訪問とアンケート調査の総括

「からだのとしよしつ」の対策を参考にアンケート用紙を用意し、いくつかの図書室に問い合わせしてみた。ご回答下さった川崎市立井田病院と順天堂静岡病院の図書室ご担当者に感謝しつつ、各回答を以下のようにまとめた。

1. 利用制限について

- ・開館の時間帯: 無人（オープンスペース）は元々制限不要。有人でも制限されていない。
- ・入室人数: すべての病院が面会禁止なので利用は入院患者のみで制限なし。
- ・入室条件: 検温、マスク着用、手指消毒は院内に入る前に義務化。入室記録は緊急連絡用に氏名、所属などの記録を残しているところもある。靴底の消毒、私物持ち込み、会話は禁止されていない。貸し出しは不可の場合がある。チラシなど「自由にお持ちください」とされていた資料が撤去されているところもある。

2. 感染対策について

- ・机等の配置の変更、パーティション等の設置: スペースの広いところは実施されている。
- ・消毒スプレーや消毒シートの設置: 実施されている。
- ・消毒機材の設置: 「からだのとしよしつ」は紫外線除菌ボックスを当初から設置している。

3. リモート利用環境の整備について

- ・HP上で感染予防のためのページを「からだのとしよしつ」が新設している。メール応答などリモート・サービスの試みはなされていない。

4. 図書館スタッフの義務について

- ・自身の検温、手指消毒は義務的規定となっているが室内の換気、清掃、図書の除菌は自主的範囲で行われている。

5. 自由回答：

コロナ以前はボランティアが担当していたが、昨年2月末よりボランティア活動が中止されたため、図書室司書が患者図書室管理を兼業で行っているが、清掃、整理整頓のみである。ボランティア不在により、「患者からの相談」を職員につなげる業務ができなくなった。また、患者用のプログラムであるがんサロン、ピンクリボンサークル、お茶会などもすべて中止となっている。(井田病院)

III. ホームページを閲覧して推定できることから

当会、全国患者図書サービス連絡会が把握している病院内患者向け図書室は、全国で145か所ある。各病院のホームページを閲覧して推定できることを報告に追加する。

ほぼすべての病院が面会を禁止している。特別に許可されるケースを除き、全面禁止、原則禁止、予約がある場合のみ可能となっているが、石巻赤十字病院はオンライン面会ができる。患者図書室については開・閉室を明示しているところは少ないが、多くの病院は面会禁止の影響で、ボランティアや担当者のいる図書室は自動的に閉室していると推定される。はっきり開室しているのは、無人、制限付き、移動図書のみで5か所(3%)。休室を明示しているのは20か所(14% 廃止されたのかもしれない「閉室した」と記載されている6か所を含む)。残る120か所(83%)は、特に記事がなく、無人開放型の図書室が多いので病院に入れる限りで開室しているようである。

総括的に言えば、無人開放型図書室以外はほとんどが閉室しているが、ごく少数の患者図書室は様々な制限条件を設けながらも運営されている。

IV. 除菌剤についての補足

消毒液はアルコール消毒液をお勧めする。次亜塩素酸ナトリウム消毒液は塩素系漂白剤であってモノの表面に付着したウイルスを破壊できるが、皮膚には有害。厚生省HPなどの情報によると、消毒(ウイルスの膜を壊して無毒化する)と除菌(ウイルスの数を減らす)は意味が違ふし、濃度によっても効果が違ふ。場合によって、水、熱水、石鹼も有効であり、目的に合った正しい方法を選ぶ必要があると強調している。

V. むすび

いつ通常の世界に復帰できるか見通しがつかない。医科学的に撲滅されたという宣言が出ることはないだろう。いつまでも受け身でいるわけにはいかない。

コロナが変えていく情報の流れ

神奈川県立こども医療センター

高 増 哲 也

2019年末に新型コロナウイルス感染症のニュースが流れた時は、わが国では対岸の火事といった取り上げ方であったが、2020年はじめ、ダイヤモンドプリンセス号での感染者がでてから、一気に身近なものになり、あっという間に全国レベルの一大事となった。2月に開催予定の日本臨床栄養代謝学会は、直前に現地開催が中止となり、私は現地入りで京都にいたのだが、がらがらの国際会議場でセミナーの収録だけを行いながら、いきなり学校が休校になるというニュースを聞いて、あぜんとしていた。それ以降、ステイホームという言葉がしきりに飛びかい、私たちの日常生活は一変した。

それまでの情報の流れは、人と人とがどこかで集い、その場で繰り広げられるのが常であった。それがいったん遮断されて、情報はとことん滞った。学会や講演会は中止になり、仕事の後の飲み屋さんでの歓談もなくなり、でもその頃は、せいぜい1、2か月の辛抱だと、だれもが思っていた。ところが1年が過ぎた今では、それは一時的なことではないことを、誰もが身にしみて把握している。

私は毎年夏休みに、アレルギーの小学生を対象にした、2泊3日のキャンプを開催している。生活を共にする場で、アレルギーに関する学習会の企画を開催して、自己効力感を高めることを目指している¹⁾。ところが47回目となる2020年、はじめて集合することができない事態に直面した。いったんは開催中止と発表したものの、小学6年生にとっては最後の機会となるキャンプを中止するということは、しめくくって巣立っていく行事を奪うことになってしまう。そこでスタッフみんなでネット上で議論を重ね、ウェブ開催することとなった。この頃はウェブ上で集まるということ自体、慣れていなかったため、何度も試しにつなげてみる時間を作り、音声や映像を共有できることを事前に確認した。ウェブ開催を行ってみての感想としては、こどもにとってはやはり実際にキャンプ地に行くほうがずっと楽しかった、一日中モニターの前に座っているのはきつかった、というものであった。一方、食育チームと歯みがきチームが、その活動内容と効果を報告しているので、ぜひ読んでみていただきたい²⁾。集まることができないという事態に直面して、次善の企画を実施したことには大きな意義があったのである。そして、これまで現地開催ではけっして実現しなかった、世界中の人たちからメッセージが届く、「世界の国からこんにちは」という企画も行うことができた。ブラジル、トンガ、ベトナム、タイ、韓国、中国、オーストラリア、ハンガリーで暮らす人たちの様子を、届けることが可能となったのである。そのころから、「あれ？ これはちょっと違う世界の幕開けなのかも知れないぞ？」と感じ始めた。

それと並行して、病院の栄養サポートチームの活動も、セミナーを開催したりが一切で

きなくなり、ウェブサイトで情報を伝える方向にシフトしていった³⁾。子どもたちにメッセージを届けたいと、栄養サポートチームからみなさんへ、という10のメッセージを伝えるリーフレットも作成した⁴⁾。ふと、地方の方言で伝えたら、おばあちゃんからのメッセージのような感じで、気持ちに響くかもしれない、と思いつき、私の出身地の広島弁でメッセージを作成してみた。すると反響がよく、全国の人たちが、地元の言葉でメッセージを作り始めた。さらに他言語でのメッセージも作られ、ついには宇宙のかなた、クリンゴン語のメッセージまでできて、ウェブサイト上で公開されている。地図をクリックするとその場所のことばでメッセージが出てくるので、ぜひ見ていただきたい。それぞれの言語に翻訳するにあたり、Google 翻訳の助けを借りてもいるが、ネイティブスピーカーのチェックを受けるうちに、友達と友達といったネットワークがあつという間に広がっていった。これは情報の流れ方に変化が生じているってことでは？とますます思うようになった。

全国患者図書サービス連絡会は、病院での治療生活を余儀なくされている患者さんの読書活動や医療情報活用の支援を目的に、1994年に設立され、これまでに30年近い歴史を刻んできた。医療情報の活用という視点でいえば、こういった情報の流れ方の変化は、当会の活動内容や存在意義にとっても、大きな影響を及ぼすと考えられる。言葉でいうと、「ヘルスリテラシー」を追求する、とでもなるであろうか。振り返れば、仕事上でも学会や講演会が中止となり、つづいてウェブ開催に変更となって、学術情報は活用しにくくなったのかということ、むしろまるつきり逆である。わざわざ学会会場に足を運ぶ必要がなくなり、ご当地名産品を賞味する機会がなくなった（泣）かわりに、それで浮いた時間と資金を、情報を収集して活用することに使えるようになった。講演は何度でも繰り返し聞くことができ、同じ時間に重なっているはずの講演も聞くことができ、著作権違反なので行ってはならないがスクショして保管できてしまう。英語で出版された文献は、Google Chrome から閲覧すれば自動的に日本語で読めてしまう。それを読んだ専門家は、市民にわかりやすくブログで紹介するようになってきているので、専門的な最新情報はあつという間に市民の誰でも知ること、理解することが可能な状態になる、そんな時代になりつつあるのだ。

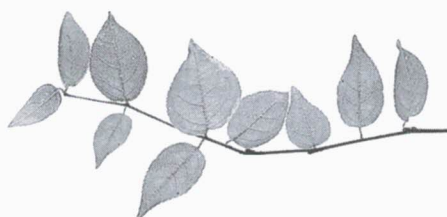
私は広島出身で、被爆2世でもあるのだが、広島の子供たちで、語り部として子どもたちに自身の経験を伝えていた沼田鈴子さんの半生を描いた、「アオギリにたくして」という映画を観た⁵⁾。感想を制作者に送ったら、そこから交流が始まり、映画館での上映が制限される中、ウェブ上映会を開催することになり、私がそこでトークを担当することになった。また、古い白黒写真をカラー化することで当時をリアルに感じてもらう活動をしている、庭田杏珠さんと渡邊英徳さんをご存じの方もいらっしゃると思うが、光文社新書で「AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦後」を出版した。私は本屋でたまたま見かけ、何気なく開いたら、そこに私の祖父がカラーで登場していた。驚いてすぐに著者

に連絡を取り、当時の記録文書などをお届けした。このスピード感は、これまでにはなかったように思う。

情報の流れが加速しているということは、ただ4Gが5Gになるというのではイメージしにくい。これまでの「障害」、情報の流れのよどみを取り除くことにもつながっている。例えば聴力障害。耳が聞こえないと、これまでは障害者という位置づけにならざるを得なかった。それがこれからは変わるのではないか。音声の情報は自動的に文字に変換されつつある。コミュニケーションに不自由がなくなれば、障害という表現が不要になる可能性を持っている。例えば国境。外国人とはこれまではコミュニケーションをとることが難しかった。言語の壁と距離の壁に阻まれて。それがどちらもなくなりつつある。国際会議もZoomで開催され、職場から参加できるようになった。さらにいうと、あいみよんのマリーゴールドを英語で歌っている動画がYoutubeにアップされていて、切ない恋心の微妙なニュアンスまで国境を超えてすぐに伝わるようになって、国際結婚とか当たり前になるかもしれないと思った。これはひょっとすると世界平和実現への足掛かりになるのではないかと、私は野望をいっているのだということを告白して、いったん筆をおきたいと思う。

文献

- 1) アレルギー児サマーキャンプ. <https://allergycamp.com/>
- 2) アレルギー児サマーキャンプ. 文献紹介. <https://allergycamp.com/page-287/>
- 3) 神奈川県立こども医療センター 栄養サポートチーム. <https://kcmc-nst.com/nst/>
- 4) 栄養サポートチームからみなさんへ. <https://kcmc-nst.com/nst/page-56/fromnst/>
- 5) アオギリにたくして. <https://aogiri-movie.net/>



全国患者図書サービス連絡会会報投稿規定

1. 本会会員（購読会員を含む）は誰でも投稿できます。
2. 本会報は、患者図書サービスをめぐるいろいろな話題や問題、そしてこれらと関係する論文、報告、資料などを掲載します。
3. 投稿原稿の採否は、役員会で決定します。
4. 投稿原稿の長さは問いません。
5. 投稿原稿の執筆・提出要領は次の通りです。
 - ① 原則としてWord形式で作成してください。
 - ② 表紙頁には標題、著者名、所属を明記し、更に、主執筆者の所属、郵便番号と住所、電話番号、FAX 番号、メールアドレス等を明記してください。
 - ③ 外国人名は原語表記または、適当な日本語表現で表記してください。
 - ④ 原稿に付随する図や、表、写真は図1、表1、写真1などの番号を付け、本文とは別に添付し、本文原稿の欄外にそれぞれの挿入希望位置を指定してください。またそれらは、スキャナを使ってパソコンに取り込んで印刷しますので、なるべく鮮明なものをつけてください。原稿も含め、投稿されたものは原則的にお返ししませんので、貴重な写真などはなるべくコピーをとってください。どうしても返却を希望されるときは、その旨お伝えください。
 - ⑤ 参考文献の記載様式：
 - i) 記載順序は出処順としてください。
 - ii) 逐次刊行物：著者、論文名、誌名、出版年；巻数（号数）：開始頁—最終頁。
 - iii) 単行本：著者、章の見出し、編者名、書名、版表示、（シリーズ名；シリーズ番号）、出版地：出版者；出版年、開始頁—最終頁。
6. 著作権は、全国患者図書サービス連絡会に帰属します。転載などを希望する場合は本会事務局に問い合わせてください。
7. 原稿送付先：info @ kanjatosho.jp

(2017.11.18 改訂)

[編集後記]

26 巻 2 号（通巻 86 号）をお届けします。

役員会は全国患者図書サービス連絡会の今後の活動について検討を重ねてきましたが、2021 年度は休会することといたしました。「会報」も休刊となります。ホームページは継続しますので、インターネットでご意見等をお寄せ頂ければ有難く存じます。

アフターコロナの新しい生活様式のもとでお会いできるのを楽しみにしております。

(編集子)

電子ジャーナルホスティングサイト

PierOnline ピアオンライン

PierOnlineは国内の学術出版社が発行する医学・薬学・看護系の学術誌を電子ジャーナルとして提供するホスティングサイトです。ご利用は1論文からPayPerView購入が可能です。

メディカ出版 25タイトルを1論文単位でPayPerView購入できます！



- ・インфекションコントロール
- ・Emer-Log
- ・オペナーシング
- ・眼科グラフィック
- ・眼科ケア
- ・サーキュレーション・アップ・トゥ・デート
- ・みんなの呼吸器Respica
- ・スマートナース
- ・整形外科サージカルテクニック
- ・産業保健と看護
- ・消化器ナーシング
- ・ナーシングビジネス
- ・整形外科看護
- ・ニュートリションケア
- ・赤ちゃんを守る医療者の専門誌 with NEO
- ・透析ケア
- ・ハートナーシング
- ・糖尿病ケア
- ・バスキュラー・ラボ
- ・ブレインナーシング
- ・YORI-SOUがんナーシング
- ・脳神経外科速報
- ・ペリネイタルケア
- ・リハビリナース
- ・泌尿器Care&Cure Uro-Lo

その他、PierOnlineには価値ある雑誌を多数収録！

- ▶ 癌と化学療法社「癌と化学療法」 ▶ 最新医学社「最新医学」 ▶ 星和書店「臨床精神薬理」
- ▶ 南江堂（南江堂オンラインJournal）「外科」「内科」「胸部外科」「整形外科」「別冊整形外科」「がん看護」 ▶ メディカルレビュー社「PharmaMedica」 ▶ 医歯薬出版「医学のあゆみ」
- ▶ ライフサイエンス出版「薬理と治療」「TherapeuticResearch」 …等

*ご利用の多い雑誌を1誌単位で年間購読も可能です。
*メディカ出版全誌パッケージのお得な価格もご用意しております。
*本文を対象とした全文検索が可能です。

SUNMEDIA 株式会社サンメディア e-Portカンパニー e-mail : e-port@sunmedia.co.jp
〒164-0012東京都中野区本町3-10-3 PORT91 Tel:03-3299-1575 Fax:03-3374-1410



国内最大級の医学文献情報データベース

医中誌 Web Ver.5

デモ版 <https://demo.jamas.or.jp/>

Database
Interface
Link
Customize

国内発行の医学・歯学・薬学・看護学等の定期刊行物のべ約7,500誌から収集された膨大な医学文献情報をインターネットで検索できます。検索対象は1946年から最新データまで約1,400万件。

直感的に検索できる検索インターフェース（PCおよびモバイル）をご用意しています。また、医学用語シソーラスや検索履歴を使い、より適合性の高い検索結果を得ることができます。

医中誌Webから電子ジャーナルや全文PDF等のフルテキストサービスにリンクしている件数は400万件、うち140万件は無料で公開されています(2021年3月現在)。また、図書館システムとのリンクも行えます。

大学・病院・企業・公共図書館などそれぞれの環境に応じたご利用機関ごとのカスタマイズ、「My医中誌」による個人ごとのカスタマイズが行えます。

法人向け「医中誌Web」

1年間の固定料金制。同時アクセス数2で250,000円（税抜）～同時アクセス数上限の無いプランもございます。

個人向け「医中誌パーソナルWeb」

1ヶ月8時間利用で2,200円（税込）～

特定非営利活動法人 **医学中央雑誌刊行会** <https://www.jamas.or.jp/>



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東2-5-18

TEL: 03-3334-7625 FAX: 03-3335-3327 E-MAIL: info@jamas.or.jp



公共・大学・学校・専門図書館員はもちろん、さまざまな立場の「調べたい」人を応援する1冊です!!

課題解決のための 専門図書館ガイドブック

専門図書館協議会私立図書館小委員会・編

本書は、原則として一般に公開されている171館の専門図書館について、開館時間、アクセスなどの基本情報やレファレンス・サービスの受付方法のほか、各館の特徴を簡潔な文章と写真で紹介しています。

また、図書館紹介ページのほか、レファレンス事例や、図書館スタッフへのインタビュー記事なども掲載しています。巻末には、ネットで調べられる専門図書館サイト、専門図書館の横断検索サイトを紹介するページのほか、図書館名索引、キーワード索引が役立ちます。



●B5判・カラー 176ページ
定価：2,970円（税込）
ISBN978-4-902666-38-0

もくじ

1. 暮らし・スポーツ・文学
2. ビジネス・産業
3. 科学技術・医療・健康
4. 歴史・地理・哲学・宗教
5. 子ども・教育・社会・人権・女性・福祉
6. 美術
7. 音楽・演劇・映画・メディア
8. 行政・防災
9. 国際・海外・語学

- ・レファレンス事例
(BIC ライブラリ、市政専門図書館、石川武美記念図書館、松竹大谷図書館)
- ・インタビュー
(旅の図書館、野球殿堂博物館図書室、からだ館、国立極地研究所情報図書室、大倉精神文化研究所附属図書館、三康図書館、東京大学教育学部附属中等教育学校、大宅壮一文庫、あーすぶらざ映像ライブラリー・情報フォーラム)
- ・ネットで調べられる専門図書館サイト
- ・専門図書館の蔵書横断検索サイト
- ・キーワード索引
- ・図書館名索引



読書工房

〒171-0031 東京都豊島区目白3-13-18 ウィング目白102 電話：03-5988-9160 ファックス：03-5988-9161 Eメール：info@d-kobo.jp

<https://www.d-kobo.jp/> ●読書工房のウェブサイトからもご注文いただけます。(送料無料でお届けします)

全国患者図書サービス連絡会会報 ISSN 1344-2937

第26巻 第2号 (通巻86号) 2020年12月30日発行

発行所：全国患者図書サービス連絡会 (<http://kanjatosho.jp/>)

株式会社 北杜社

〒212-0033 川崎市幸区東小倉8-15

印刷所：株式会社 中島印刷所

〒232-0026 横浜市南区二葉町4-39